漫湖公園 Park-PFI 連携事業　企画書(案)

まちのシンボル「コミュニティアート」制作プロジェクト（仮）

令和 7 年 3 月 12 日
漫湖水鳥・湿地センター

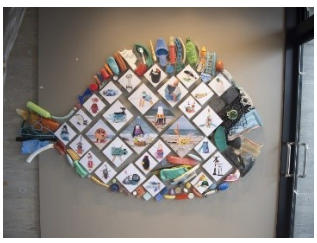
1.ビジョン	コミュニティアートでつながる湿地と人が共生する都市公園(仮)
2.現状分析	・漫湖の漂着ごみは 99.9%が国場川流域から流入する街中の生活ごみ ・センターボランティアの定期清掃活動だけで年間 300 kg以上を回収 ・チュラカーギ作戦や水あしび等の市民参加による清掃は 20 年以上継続 ・継続した清掃活動により市民の主体的な活動の輪がひろがる ・未だに後を絶たない周辺の生活圏から流入するごみ（問題） ・干潟やマングローブ林内など、移動や運搬が困難な場所に堆積するごみ(問題)
3.課題	①陸域から発生する漂着ごみの発生抑制 ②ごみ回収未実施エリアの課題解決に向けた新たな担い手の確保 ③流域思考の浸透と地域コミュニティの活性化 ⇒漫湖の漂着ごみ問題に無関心層への普及啓発と主体化を促す新たなアクション
4.事業概要	公園・湿地と地域・人のつながりを醸成する活動として、那覇市、豊見城市、漫湖水鳥・湿地センター、OSD 社、スターバックス店舗が連携し、まちのシンボル「コミュニティアート」を地域の人と共同で制作し、公園と湿地センターに設置する。
5.効果/メリット	・地域のシンボルとなるコミュニティアートは、他人ごとになりがちな環境問題の感覚的手段による問題提起につながり、不特定多数の市民に「自分ごと」として捉え直すきっかけを与える。 ・制作過程と維持管理に地域の人が関わることでコミュニティが活性化し、地域課題に継続的かつポジティブに取り組む多様な価値観を持つ市民が増える。 ・漫湖に漂着したごみの回収量向上と街中から生活ごみの発生抑制に取り組むことは、海洋に流入するごみの減量にも寄与する。
6.対象（受益者）	漫湖周辺の地域住民、県内芸術系大学、民間企業、漫湖を訪れる県内外の観光客等
7.予算規模	100 万～500 万(想定)
8.実施期間	2025 年 9 月～2026 年 3 月(想定)
9.招聘作家	[淀川テクニック] 2003 年に大阪・淀川の河川敷を拠点として活動開始。ゴミや漂流物などを使い、赴いた土地ならではのゴミや人々との交流を楽しみながら行う滞在制作を得意とし、その土地に所縁のある生き物をモチーフにした作品など様々な造形物を制作する。日本全国、海外でも多数制作を行っており、自治体や企業からの依頼実績もある。

a.

b.

c.

d.



a.「宇野のチヌ」(2010) ｜ b.「イワトビペンギン NO.01」(2015) ｜ c.「梅田みらみらの木」(2019) ｜ d.「もとぶフローミー」(2019)